それでは、突然ですが、今から１０年前の２０１１年３月１１日、日本で何が起こったか知っていますか？

まだ生まれていなかった人もいるので、知らないかと思いますが、東日本大震災が起こりました。マグニチュード９．０。最大震度７というとても大きな地震が起こり、そのあととてつもなく大きな津波が東北地方を襲い、町ごと何もかも流され、多くの人が命を落としました。

この震災で亡くなった人や行方が分からなくなった人は、２２，０００人あまりといわれています。

この地震で、被害にあった地域を「被災地」と呼びますが、先生は，この東日本大震災のあと，宮城県へ行って、被災地の学校で３か月間働いた経験があります。

先生は南三陸町というところへ行きました。車で１１時間～１２時間くらいかかるとっても遠い所です。

南三陸町は、人口１７６００人くらいの小さな町です。それでも、この震災で１２００人くらいの人が亡くなりました。

先生は、伊里前小学校という、全校１４０人ほどの小さな学校で働きました。家が流されたり、壊れてしまったたりした子が５４人いました。それから、お父さんやお母さんを亡くした子が４人いましたが、子どもたちと先生たちは全員無事でした。

伊里前小は、海からは１７メートルくらい高い丘の上にあるのに、それでも津波が襲ってきて、校舎の１階が４５センチほど水につかりました。

３月１１日　地震が起こった時、高学年は授業中で、低学年は下校した後だったそうです。ものすごい揺れのあと、高学年は運動場へ避難し、低学年は、下校した後でしたが、先生たちが手分けして、津波が来る前に全員を学校へ連れ戻したそうです。そして、学校のすぐ上のさらに高いところにある中学校へ避難しました。

そのまま中学校が避難所になり、津波が引いた後、全員がそこで一夜を過ごしました。電気も暖房もなく、雪が降るとても寒い日でした。布団や毛布もない体育館で夜を過ごすために、先生方が教室のカーテンを全部外して持ってきて、それを布団代わりにしたそうです。食べるものもなく、２日目までは、ラップに包まれたゴルフボールくらいのおにぎりが、朝と夜に１つずつもらえただけでした。３日目の夜になって、初めてお代わりをしてもいいよと言われた時の子供たちはとても喜んだそうです。

全員の子供たちが家族に会えたのは、５日後のことでした。最後まで家族のお迎えを先生とともに待っていた子は、お母さんが亡くなってしまった子でした。

津波が引いた後の校庭は、こんな風になっていました。時計は、地震が起きた時間で止まっています。たくさんのがれきが押し寄せ、教室にも、泥がたくさん入りました。

学校の再開を目指し、先生方は校舎に入った大量の泥を掃除するのにとても苦労したそうです。

そして、震災から２か月後に１学期がスタートしました。電気がついたのは、始業式の前の日だったそうです。それまで、２か月も電気のない生活をしていました。水も最初は出なかったので、バケツに汲んだ水でトイレを流したりしていました。

給食も、給食センターが流されてしまい、パンと牛乳だけの給食が続いたそうです。

そして、いよいよ先生が働き始めた７月の様子です。震災から４か月たっても、こんな風にがれきでいっぱいでした。

建物の屋根に車が乗っかっていたり、あんなに硬いはずの電柱がバキバキに折れ曲がっていたり・・・町をこんな風にしてしまう津波のおそろしさを感じました。

震災の前はこんな風に家が立ち並び、とてもきれいな風景が広がっていました。

こんな状態だった運動場は、すっかり片付き、運動場の半分は仮設住宅が建っていました。そして、子供たちは狭くなった運動場で元気に遊んでいました。

では、家が流されたり、壊されてしまったりした子の生活はどんな風だったでしょうか。

これは、まだ避難所で生活していた子の生活の様子です。ものはこれだけしかありません。すべて津波で流され、ここに写っているものも、ほとんどが支援物資といって、被災地の人たちのためにと、全国から送られてきたものです。

これは、仮設住宅です。プレハブの建物に、たくさんの家族が生活をしていました。部屋はそんなに広くありませんし、壁が薄く、声や音は丸聞こえだったそうです。

みんな、この様子をみてどうですか？先生が、今日のお話でみなさんに伝えたいことの１つ目は、私たちが当たり前だと思って生活していることは、実は当たり前のことではないということです。私たちは、みんな帰る家があって、家族がいて、学校で勉強したり遊んだりすることができ、ご飯を食べ、お風呂に入り、お布団で眠る・・・と何不自由ない生活をしています。でも、このような大きな地震や災害が起こったら、そんな当たり前の生活ができなくなるのだということ、そして、当たり前の生活ができていることはすごくありがたいことなのだということを先生は被災地の人たちから教えてもらいました。堀津小のみんなにも、当たり前に生活ができている

ことに感謝をして、身の回りの物や家族、そして仲間を大切にして生活をしていってほしいと思います。

皆さんに伝えたいことの２つ目は、周りの人たちと助け合い、支えあって生活することの大切さです。被災地の人が、あんなにも大変な状況から、立ち上がり、震災前の生活を取り戻そうと頑張ることができたのは、お互いに助け合い、支えあって生活したからです。震災のすぐ後、体育館で多くの人が生活していた時、３日目までは朝と夜に小さなおにぎりが１つずつもらえただけでした。それでも、誰も文句を言わず、みんなで平等に分け合って生活しました。独り占めしようという考えの人は一人もいなかったそうです。みんなで助かるために、自分勝手な、わがままな考えは捨て、お互いを思いやり、全員で助け合おうとしていたからこそ、あんなに大変な状況から立ち上がってこれたのだと思います。人は、助け合い、支えあって生活することで、ものすごいパワーが生まれるんだなと被災地の人たちを見て実感しました。

伊里前小の６年生のある男の子は、消防士をしているお父さんをなくしました。地震のあと、お父さんは町の人たちのため、消防車で町を回って避難を呼びかけているときに津波にのまれ、命を落としました。お父さんが亡くなって、とても悲しい思いをしながら、毎日を過ごしていたと思います。でも、学校ではそんな悲しい顔は一度もみせず、一型糖尿病という病気を持った友達のことを心配して、毎日保健室について来てくれていました。この６年生の男の子の姿を見て、先生は、自分がどんなにつらい思いをしていても、仲間のことを思いやり、行動できる姿にとても感動しました。そして、伊里前小にはこんな風に仲間のことを思いやり、支えあって頑張ろうとする子供たちがたくさんいたからこそ、毎日一生懸命勉強し、仲間と楽しく過ごし、とてもよい学校を作り上げていたのだと感じました。

堀津小もとてもいい学校だと先生は思います。でも、物や仲間を大切にできていないときや、自分勝手な考えや行動で、周りに迷惑をかけたり、仲間を傷つけていたりしているなと感じるときもあります。私たちは、毎日当たり前に生活ができています。被災地のような辛くて不便な生活をしているわけではない私たちが、学校生活に一生懸命取り組めなかったり、モノや仲間を大切にできなかったり、傷つけてしまっていては、被災地の子供たちに恥ずかしいし、申し訳ないなと思います。ぜひ、みんなにも伊里前小の子たちのように、自分勝手なわがままな考えや行動をやめて、仲間を思いやり、助け合い、支えあって生活してほしいと思います。そして、堀津小をさらによい学校にしていきましょう。